近代／脱近代論と脱植民地主義　－研究の課題と方法論に関わって－

著者	尹　健次
雑誌名	JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2002
巻	9
ページ	5-36
発行年	2003-03-31
その他のタイトル	Modernity/Post-modernity and Post-colonialism: On the Talks and Methodology of Historical Research
URL	http://doi.org/10.15055/00003875

近代／脱近代論と脱植民地主義
― 研究の課題と方法論に関わって ―

尹　健次

今日は表題を見ますと、「日本統治下の朝鮮」、そして「研究の現状と課題」という非常に大きな主題が掲げられております。主としては、歴史学研究を中心に考えられたシンポジウムだろうと思います。日文研のようなたいへん立派な施設で、こうしたお話をさせて頂くということで、ありがたく思っております。ただ私は歴史についても少しは勉強しているかも分かりませんが、自分が何を勉強しているのか、本当のところはよく分かりません。ですから必ずしも、この主題にお答えできるようなお話ができるかどうか心許ないですが、一応準備してきたことを中心にお話したいと思います。１時間ということですので、できれば私の基本的な考え方というか、現在思っていることをお話できればと思っております。

皆さんのお手元には、私が前もって送付しておいたレジュメ２枚――Ａ４で２枚が手渡っているはずです。それと今日、急遽コピーして頂きました、私の本に対する吉野誠先生の書評――これはＡ４で１枚です。この２種類がお手元に渡っていると思います。

韓国は本当に激動している国といいますか、地域だと思っております。実は昨年度１年間、私は在外研究の機会を与えられましてソウルに行きました。１年間ソウルにいたわけではありません。最初の５カ月はロンドンに行って、図書館で勉強し、いくつか研究会にもでましたが、ずいぶん遊びもしました。それから９月から１学期間、ソウル大学に「国際地域院」というところがあります。そこに属して、大学院の授業をし、そしていろんなことをしながら７カ月間過ごしました。韓国は随分変わったなと思っております。言論の自由っていいますか、

話しをし、活動するという意味では昔とは様変わりで、ほとんど何の制約も感じませんでした。日本以上に活発な、いろんな討論会とか集会とか、そういうものがあるわけですから、私としては非常に忙しく７カ月間過ごすことができました。

私は『現代韓国の思想』という本を２年前ですか、2000年９月に出したんですが、それは少し大げさにいうと本や論文を読んで書いたものです。いわば、現場を知らずに書いたということです。ある意味では現場を知らない、あるいはそこで取り上げたいろんな人たちを知らないから、また書けたという側面が非常に大きいものです。いま、同じ文章、同じ本を書けと言われたら、多分書けないのではないかとさえ思います。ソウルにそれでも７カ月も滞在していろんな人を知っていますので、あの人の顔が浮かんだり、この人の顔が浮かんだりと、またこういうと叱られるかなとか、いろんな邪念が入りますので、たぶんもう書けないのではという気がいたします。

今年３月末まで、そうしてソウルに７カ月間滞在しまして、それこそ毎日、毎日、――厳密にいうと、１週間に２回か３回集会に出て、シンポジウムに出て、発表したり、議論をしたりし、また各種の原稿を書き、新聞に連載したり、カルチュアセンターのようなところでお話もしました。もちろんソウル大学でも大学院の授業をもったわけですが、そういういろんなことをして、ある意味で、韓国現代思想の現場を渡り歩くというような感じをもったわけです。その過程で、自分が本に書いたことを検証し、また足りない部分、こういう点が足りなかった、あるいは場合によっては間違った評価をしているというようなことも発見したりもしました。その結果、現時点では、私が書いた本と自分が実際に動き回って感じたこと、検証したことを踏まえて、韓国の社会、あるいは思想の状況が割合に見えてきたのではないかと思っております。ただそれが学問的な意味で、何か一つ整理をされた形で出せるか、あるいは今日こういう場できちんとお話しできるかというと、とても自信をもてないというか、ちょっと難しいかなという

気もします。いずれにしろ今日「近代／脱近代論と脱植民地主義」ということに関わって、またこのシンポジウムの主題に何か役に立つような方向でお話をしたいと思います。

ご存知のように韓国ではポストモダンという言葉が非常に流行っています。ポストモダンというのは、厳密に言えば日本でよく使われる言葉ですけれども、韓国でもポストモダンという言葉がよく使われます。しかし韓国の場合、「脱近代」／「脱近代論」と漢字表現がなされる場合も多いのです。もちろん活字化されたり、発音されるときはハングルですが、日本でいう漢字語ではそういう表現だという意味です。同じように日本ではカルチュラル・スタディーズと、こう言うわけですが、韓国では「文化研究」といいます。日本ではポストコロニアルとかポストコロニアリズムと言いますが、向こうでもポストコロニアルとかポストコロニアリズムと言うときもありますが、これは「脱植民地主義」という場合が多いのではないかと思います。これは英語のカタカナあるいはハングル表現と、あるいは漢字表現という差異だけではなく、そういう呼び方自体が、すでに大きな意味合いの違いをもっているというように思います。後でそうしたお話をしますが、今日はいずれにしろ歴史研究と関わってお話しなくてはいけませんので、まずそこから入っていきたいと思います。

フランスの思想家ブローデルは、いろんな学問――政治学とか、経済学とかいろんな学問がある中で、やっぱり歴史学が一番大事なんだということを言っております。つまり歴史学は人間諸科学の頂点になければならない、そして歴史学が社会科学の中心であるためには、社会的なものすべてに関心をひろげ、「全体的」でなければならないと言っています。私もまさにそう思います。私たちは生きていく上で、いろんなことを考えなくてはいけないわけですが、やっぱり知識をもって仕事をする、いわゆるインテリの場合には、とりわけ歴史というもの――それを日常の思考の範囲でいいますと「歴史認識」というこ

とが、やはり一番重要な考え方、あるいは活動の原点になるんではないかと思っています。歴史認識を欠いて物事を考えたり、あるいは行動したりすることは、厳密には不可能であると。また実際問題として、どういう歴史認識をもつかによって人びとの行動は全然変わってきますので、それをどのように組み立てていくかということが非常に重要な問題だと思います。

私は在日朝鮮人二世ですが、実際には、私は朝鮮人として生まれることを選択したわけではありませんし、また日本で生まれることを選択したわけでもありません。貧乏な家の育ちですけれども、できれば金持ちに生まれたかったなと思うときもあるんです。しかしこれはもう仕様のないことでしてね。そういうことを考えるようになった時は、すでに決まっていまして、自分でどうこうすることはできないのです。それとまったく同じことで、自分が考えていることをちょっと疑問をもったり、ちょっと考えてみたいなと思った時には、その前にすでにかなりの程度、一つの歴史認識というものが与えられております。私、今こうして非常にうまく日本語を話しているつもりですが、ひょっとして韓国から来た人は褒めてくれるかも知れませんが、基本的には誰も褒めてくれないです。日本語が話せて当たり前のことでしてね。しかしこれは逆に言いますと日本語しか話せないということです。一生懸命勉強して朝鮮語は少し話せますけども、基本的にはネイティブは日本語だということです。つまりこれは私が日本語を勉強したくて勉強したんではなく、生まれたときから勉強させられたということなんですね。それしか知らないということになるわけです。

そういう意味では歴史認識というものも、これはやっぱり私たちが考える以前に、すでに与えられてしまうんです。歴史というものをいつ頃から考えるか分かりませんが、早い人は高校時代から考えるかも分からないし、あるいは大学に入って、あるいは社会人になって、研究者になって、はじめて本格的に考えはじめるのかも分かりません。しかし歴史を考えるといっても、その基礎知識は基本的にはすでに与

えられたものとしてあるんだろうと思います。しかもそれは教科書問題でも分かりますように、その与えられ方は最初から篩（ふるい）にかけられたものなんです。公教育、国民教育、つまり国家権力による体制教育で与えられているわけですから、一つの型として、極端な場合は、それは正史として、国史として教え込まれているんですね。そしてそれは多くの部分で、歴史の事実を歪曲したり、あるいはある意図をもって形作られているんだと思います。その意味では、そういう力をもつようになったとき、自分で考え、そしてすでに与えられているものを作り直す、いわば歴史解釈、歴史認識というものを再構成していくということが非常に重要になると思っています。これはもう人びとすべて、とくに知識人にとっては基本的な命題になるんではないかと思います。

実はその歴史とか、歴史認識、あるいはその元になる歴史研究というものの枠組みが、日本もそうですけども、とくに韓国の場合は1980年代以降大きく変わってきたと思います。1980年代には、70年代とは違う形で大きく変わりましたし、また1990年代は、80年代とはまた違うかたちで大きく変わりました。そしてその大きく変わったかたちで21世紀を迎えて、われわれは今この現実を生きているということになります。

「植民地研究」というのは非常に重要だと思います。日本の植民地支配を受けた原因とか、実際のありよう、そしてその結果というか後遺症など、植民地遺制というものを研究することは現在を生きるうえで決定的な意味をもつことはいまさら言うまでもないはずです。これはやはり現在生きている一人ひとりの人間の生き方を規定することにつながるだろうと思います。しかしそれはより大きくいえば、われわれが生きているこの人類史で、「近代」という時代をどう認識するかという大きな問題に関わってくることです。

在日朝鮮人もそうでしょうが、韓国という範疇で考えてみても、その歴史は世界のあらゆる矛盾が集中したものとしてあるはずです。在

日朝鮮人を研究してみると、政治・経済・歴史、いろんなことをとことんまで追求していかなくちゃいけなくなります。あまりにもその範囲が広く、そして深さが深いため、大学院生になって在日朝鮮人を研究するんだといっていた人がいつのまにか、博士課程に入る頃には、研究テーマを変えてしまっていることが少なくないようです。これはやはり在日朝鮮人を研究していくと、あまりにも広く、深くなっていって、どうやっていいのか分からなくなるためではないかと思われます。だから止めたということになるんだろうと思います。在日朝鮮人にしろ、あるいは韓国を研究するということは、そういう意味でたんに旧植民地出身者や韓国、あるいは南北朝鮮、そして植民地時代、さらには解放後の時代の研究にとどまらなくなり、もう少し東アジア、あるいはもっと広く、西洋史、西洋を含めた世界全体――現時点でいえば「近代」というものを問い直していくという大きなテーマになっていくのではないかと思います。

韓国において、そうした考え方、歴史の見方、勉強の仕方が大きく出てきたのは、やはり1980年代だろうと思います。皆さんご存知のように民主化闘争というものがありました。1960年の4・19学生革命、それにつづく民主主義を求める闘い、そしてそれを阻止した朴正熙（パク・チョンヒ）による軍事クーデターというものを経験して、さらにそうした軍事独裁支配の極限的な表現でもあった維新体制、それに反旗をひるがえす1970年代以降の民主化を追い求める闘いがありました。1980年代にはいってその民主化闘争はますます高揚していったのですが、そこではマルクス主義的な思考が導入され、解放後韓国の歴史研究、そして学問研究全体が大きな変容をとげていきました。とくにさきほどいいましたように、基本的な学問である歴史研究において大きな転換が生じたといっても差し支えないはずです。もちろん歴史研究という部分でいいますと、私は専門ではありませんが、その前から、あるいは日帝時代、その後期から末期に、すでに社会経済史的な研究でいろんな成果があったと言われております。植民地下の朝鮮では停滞史観、他律性史観、文献中心の考証学といったいわゆる植民

地史観が大きな位置を占めていました。しかしそのなかにあって、朝鮮人学者によって社会経済史の方法論で資本主義の萌芽について問題提起があったのです。いわゆる資本主義萌芽論ですが、それがその後の内在的発展論などにつながったと言われております。素人の私がとやかく言うよりも、幸いにもこのあと、鄭在貞（チョン・ジェジョン）先生がそういうお話をされると思いますので、私はむしろ何も言わないほうがいいだろうと思います。

いずれにしても、韓国という国家、南北朝鮮という一つの地域の歴史というのは、世界史、人類史の矛盾を最も多く抱え込んだところのひとつだというように思っています。したがってこれはやればれるほど奥深く面白い。面白いというと語弊があるかも分かりませんが、これは学問研究では非常に重要なテーマであると思います。第三世界から、例えばポストコロニアルというもの、あるいはオリエンタリズムといった考え方ないし学問研究の方法論といったものが出てくるのも、世界や人類の矛盾をよりはっきりと認識できるということからだと思います。第三世界から現代の優れた社会科学者が出るのはけっして偶然ではないはずです。サイードとか、スピヴァックとか、現在たいへん活躍している人たちはやはりそれまでの人に比べてもっと幅が広く、奥深い、人類すべてに通用するような考え方、学問研究というものを提示しているように思えます。当然、そうした優れた人が韓国から出てもおかしくない、そういう歴史的位置付けに韓国はあるのではないかと思っています。

その出発がさきほど少し申し上げました1980年代ではないかというのです。歴史研究を中心に、1980年代にいろんな成果が積み重ねられ、それ以降、非常に厳しい民主化の闘いのなかでいろんな学問研究が花開いたとまでは言いませんが、かなり大きな位置、意味を占めるようになったんではないかと思っております。ご存知のように韓国でマルクス主義というものは解放後の反共主義のなかで一旦つぶされて、1980年代、それもどちらかというと後半以降に一挙に大きく躍り出ま

した。しかしそれもまた、1990年代になると社会主義圏の崩壊や米ソ冷戦の終焉という時代背景でぽしゃりはじめてしまうんですね。極めて短い、極めて集中したかたちで出て、またそれが潰れていく、…潰れるというまではいかないですが、関心が他のものに移っていく。韓国というのはヨーロッパで200年、300年、400年かかって経験するようなことを、いっしょくたに同時に経験するという、そういう時代を経験したし、いまもその渦中にあるんではないかと思います。それを私は「圧縮近代」と呼びたいと思っています。

1980年代に韓国でマルクス主義が再び受容されるとき、それは中南米を中心に流行っていたというか、大きな力を得ていた従属理論というかたちで導入されます。しかし少し勉強してみると、どうもこれは違うんじゃないかということで、正統マルクス主義の勉強に入っていくんです。そして政府権力の弾圧をかいくぐりながら、87年の「民主化宣言」を越えて、89年に「資本論」が刊行されることによって、一応の段階、収束というか、――そういう時期を迎えます。すると実際には10年にもならないということになるんですね。

最近韓国でローザ・ルクセンブルクに関する本が、翻訳として出はじめたようですけども、ある日本人に言わすと、これはローザ・ルクセンブルクをポストモダン的に読み解く本として出ているもんだと。あるいはそういうことを意図する研究者が翻訳しているのかも知れません。この場合、ローザ・ルクセンブルクがはじめて韓国に紹介されたわけでもないでしょうが、まとまった著作としては珍しいのだと思います。それが少なくとも研究者など人びとに割合に簡単に目に付くようなかたちで紹介され、利用されるというとき、現在流行りのポストモダンのかたちで紹介されたということになります。多分私の推測では、これはもう少しいくと、つまりもう少し時間が経つと、ローザ・ルクセンブルクが本来主張していた帝国主義とか民族問題とか、そういうものとしてもう一度、再受容されるんではないかと思います。それだけ韓国の思想の導入、受容、あるいは受け止め方、考え方というものが、世界の最先端を受け入れつつはじまり、しかも後戻りする

ということなんです。凝縮されたかたちで展開するというふうに言っていいのかも知れません。

私は朝鮮の近代を考える場合、大きくいって2つの特徴をもっていると思います。開港期からはじまって自主的な近代化をはじめたけども、結局は日本の植民地支配を受けたということ。そして解放されるや否や、南北に分断され、内部で戦争までして今にいたるまで分断状況が続いているということです。簡単にいいますと、朝鮮の近代史というのは、日本による植民地支配と解放後の南北分断によって規定されている時代ということになります。もちろん開化派による自生的な文明開化の動きとか、細かいことをいうときりがありませんので、大きく言うと、そうした2つの特徴をもっているのではないかということです。朝鮮近代を規定しているのは、日本による植民地支配と、南北分断であると。しかも解放後の南北分断というのは、実際には韓国ではアメリカへの従属という性格を帯びていますので、朝鮮近代は支配形態でいうと「植民地支配」と「半植民地支配」という特徴をもっているのではないかと思っております。ということは、朝鮮近代を研究する場合は、確実にこの事実を踏まえていなくちゃいけない。つまり植民地支配を受けた、そしてその後も南北分断という形で半植民地の状態にあるんだということをわきまえることが、まず前提条件だと思います。それを曖昧にした歴史研究、――歴史研究のみならず、他の研究も含めて、すべてあまり意味がないというと言い過ぎかも分かりませんが、私はあえてそういうふうに考えたいと思っています。世界の多くの後進国はだいたい、植民地、そして半植民地という時代を経験しております。その意味では世界の歴史に繋がる特質を集約的に、非常に明確なかたちで南北朝鮮、韓国の近代史はもっているということです。

それじゃ、日本の近代史はどう考えるのか。これはいろいろ考えられるでしょうけども、私はやはり、日本は欧米列強による侵略の危機

にひんして、例えば吉田松蔭の思想などに先導されるかたちで天皇制国家を作っていったと思っています。そして1945年８月15日の敗戦後は、何だかんだと言いながらも、やはり象徴天皇制というかたちで天皇制が継続しているということです。大日本帝国憲法をみても、現在の日本国憲法をみても、第１条で天皇について重要な位置づけをしています。政治機構と天皇・天皇制は不可分のものとして規定されているんです。ということは、日本の近代史というのは、一貫して天皇制の時代であるというふうに理解してもいいということになります。「天皇制」という言葉はさまざまな意味内容を含んでいます。したがって天皇制という一つの言葉で日本近代を集約させるにはある意味で危険をともなうことになりますが、それを承知しつつも、それでも日本近代は天皇制の時代であったと言っていいし、あえてそう言いたいと思っています。そこから考えると、「近代」を乗り超える、つまりポストモダン、脱近代ということは、朝鮮では「植民地支配」と「南北分断」＝「半植民地」というものを乗り超えるということが課題になり、日本では帝国主義、そしてとくにその基軸である天皇制を乗り超えることが課題であると言ってよいと思います。

そういうふうに考えますと、朝鮮の植民地時代を研究する、あるいはもう少し現代まで含めて朝鮮の歴史を勉強するんだという場合、これはやはり植民地支配とは何であったのか、南北分断、半植民地とはどういうものなのか、という研究をしなくちゃいけないことになります。そしてそれを乗り超える方途として、植民地的な遺産、悪い意味での遺産を清算することを考えなくてはいけないし、またアメリカの覇権主義による南北分断、半植民地の状態をどう脱却して、脱分断・統一を達成していくかということを考えないと、学問研究のほんとの意味は出てこないんではないかと思うのです。意味はないというと、少し言い過ぎかなという気はしますが、やはり最も重要な問題がそこにあるというように理解していただければと思います。日本の場合には帝国主義、天皇制を脱却するというか、乗り超えていこうとすることが学問研究の基本的命題になるし、またそうでなければならないと

考えております。

もっとも、現実は必ずしもそうはなっていません。その点では、日本と韓国でいうと、まだ韓国の方が現実に直面している問題の重さ、複雑さからして、歴史の課題に正面から取り組もうとしているんじゃないかという気がいたします。日本では天皇・天皇制研究といえば、それだけで忌避されがちで、せいぜいのところ、脱天皇制ではなく、脱帝国主義の議論がなされるだけではないでしょうか。もっとも韓国の場合でも、じゃあ例えば、植民地支配と深い関わりがある日本の天皇制のことをきちっと研究しているかというと、これは非常に難しくなります。実際にはそれほどされてないと言っていいでしょう。朝鮮人の内面形成、精神形成において、天皇制なるものがどのように位置付いていたのかということは、これまでほとんど研究されてこなかったんではないかと思うくらいです。私は全部承知しているわけじゃないですが、少なくとも先行研究をみるかぎり、成果はあまりないというか、ほとんどないと言っていいのかも知れません。強いていうなら、親日文学の研究で少しされているのか分かりませんが、そいう基本的、原則的なこと、そして倫理・精神の根幹に関わることがこれまでおろそかにされてきたんではないかという気がするのです。実際韓国ではしばしば「親日派」のことが議論されますが、それは民族への裏切りとかいった、きわめて政治主義的、民族主義的な次元のものではないかと思います。

問題を拡散してもいけませんので、できれば「近代／脱近代論と脱植民地主義」ということでお話をしたいと思います。一つ、これはまた後で鄭在貞（チョン・ジェジョン）先生がお話しなさるでしょうが、植民地近代化論という問題が大きな問題としてあるだろうと思います。収奪か開発かという問題。これは日本の場合には、数年前から議論されている「総力戦体制」という命題と関わってくると思います。「連続性」というものを強調するということだと思います。私はこういう研究は必要だと思いますが、たださきほど言いました近代の特質、わ

れわれが抱えている課題という側面からすると、少し物足りないというか、危なっかしい側面があるのでは思っています。

韓国における研究に即していいますと、問題はやはり、朝鮮近代史、とくに植民地研究というものを、あるいはその後の現代に至るまでの歴史を、日本との関係、あるいはアメリカとの関係で具体的に考えるだけじゃなくて、近代というもの、人類史というものをふまえた、ある意味ではポストモダン／脱近代のテーゼがもち出した問題意識、論点まで含めて考えることが必要ではないかと思っています。その意味では1990年代以降、それまでのマルクス主義、あるいはより具体的には社会構成体論争というもので明らかにされた問題意識を引き継ぎながら、同時に、それと断絶するかたちで出されてきたポストコロニアルの研究、脱近代的な研究をどう組み合わせて、並行的に考えるのか、ということが非常に大きな意味をもってくるというふうに考えます。ただそれがうまくいっているかというと、私は現実にはそううまくいってないというように考えています。だからそれを今後どのようにうまくいくように努力するかが、大きな課題ではないかなと思うのです。

私もいま、私なりにそうした問題を考えてみたいと思っています。ちょうどついこの間、韓国で出た雑誌『文化科学』の秋号に「近代プロジェクトと脱近代論、そして脱植民地主義」という論稿を掲載してもらいました。少し長い論稿ですが、日本でも近いうちに論文集の一部として収録したいと思っています。

それではここで、「近代」と「脱近代」について少しお話をしてみようと思います。これはさきほど言いましたように、モダンとポストモダンというと、ちょっと語感が合わないような気がするのです。ですから「近代」と「脱近代」といいます。朝鮮語でいうと「クンデ」と「タルクンデ」ですね。そういうことについて、わたしなりに少しまとめてみようと思います。

まず1980年代の社会構成体論争ですが、よくそれは抽象的、観念的で、原典中心主義で何がなんだかよく分からないものだったと批判さ

れますが、私はそれでも、それは当面する課題にたいして重要な論点を提出したと思っています。韓国社会の基本矛盾は何かということを資本主義の発達やアメリカ帝国主義との関係で必死に考えようとしたし、それがまた「民族民主化運動」といわれた民主化闘争の重要なエネルギーを引き出すことにもなりました。やがて1987年の「民主化宣言」で韓国の民主化がある程度達成されたことになり、その一定の安定した状況のなかで韓国は高度経済成長の道を歩みました。しかしそれとほとんど同時進行で東欧の社会主義圏が崩壊し、ドイツ統一、ソ連邦の消滅と時代が激動するなかで、民主化闘争をになったマルクス主義者の多くは挫折をし、新しい道を模索していったんです。その少なからぬ人たちがフランスの現代思想、フーコーだとかデリダ、ガタリ、ドゥルーズなどに急速に惹かれていったんですね。

つまり1990年代の韓国における思想的特徴は何かといえば、それはポストモダニズムをはじめとする各種ポスト主義や文化理論などが爆発的に流行したことなんです。論壇などでそれまでマルクス主義を中心とする議論が、フーコー、デリダ、ドゥルーズなど、フランス現代思想を中心とするものに移り、活字になる言葉も資本主義とか、国家、民族、階級といった難しいものから、肉体とか欲望、文化、知識、権力といったポストモダン的というか、日常意識に近いものに変わっていったのです。ある意味では、資本主義とか国家、民族、階級といった言葉はむしろ反感をもって受け取られる社会的雰囲気が作り出されたんですね。

いわゆるフランス現代思想がどっと韓国に押し寄せたわけですが、その思考の中心はやはり、近代というものを突き詰めて考えるということ、あるいは近代ということでは見えないものを問題にするということではないかと思うんです。別の言い方をすると、近代の必然の産物で、しかも近代では解決できないものを考えるということ。例えば少数者の問題だとか、女性の問題とかジェンダーの問題、あるいは自然環境の問題、あるいは人権の問題とか、いろんなことがあるだろう

と思います。韓国では「巨視史」とか「微視史」という言い方が登場することにもなります。巨視っていうのは大きいという意味です。微視とは小さいということです。日本ではたぶん「大きな物語」だとか「小さな物語」という具合に言われるものです。マルクス主義を中心に議論された階級闘争や国家、民族といった議論の立て方は巨視史で、少数者や女性、ジェンダー、エコロジーといったものは微視史に属することになります。ほんとはこうした二分法的な言い方自体が問題であって、ポストモダンの側では二項対立、二分法の発想自体を厳しく非難しています。

韓国でフランス現代思想、ポストモダンといえば、とりわけドゥルーズが非常に好まれているようですが、それらをつうじてマルクス主義をこえるかたちで、近代だとか、近代性、そして植民地近代だとか、植民地性とかの問題が大きな関心事になっていったといえます。しかも、こうしたポストモダンの流れは時間がたつにつれて人文・社会科学全般におよんでゆき、近年では歴史研究の分野でも大きな影響を及ぼしていると言えます。よくみると、実際には、それらは、近代／脱近代をめぐる論争や、フェミニズムをはじめとする各領域での民族主義批判という形で主として論じられているといっていいでしょうが、その根底には「巨視史」にかわる「微視史」といった発想をどう理解したらよいのか、また帝国主義／民族主義、内部／外部、理性／感情、自己／他者、男／女、といった伝統的な二分法を立論の基盤として否定すべきではないのかといった基本的問題があると考えてよいのでしょう。

実際、最近の『歴史批評』の特集などにそうしたものが組まれ、またそうした類の雑誌が新たに刊行されはじめてもいます。それに例えば『ポストモダニズムと歴史学』といった類の本も何冊かありますし、韓国の歴史学界ではもう「脱国家」「脱民族」が歴史研究の課題、そして方法論に関わる大きなイシューとして浮上したといっても間違いないです。従来の民族主義の論じられ方にたいする批判はその典型的な例ですが、ただ私自身はそうした議論がこれまでの固定的な観念を

うち砕き、多様な考え方をもたらすのに有益であるとしても、それだけで南北朝鮮の歴史と社会の構造を十分に把握したり、さきほども課題として述べた脱分断、そして南北統一に向かう未来への道すじをきちんと出してくれるものであるかどうかはなお疑問だと思っているんです。

さきほど「微視史」といいましたが、それはポストモダン、カルチュラル・スタディーズの影響を受けて、微細な問題――本当はけっして小さい問題じゃないと思いますが、そういうことに焦点を当てて勉強してみようということだと思います。いわば、微視史は、なによりも階級闘争史観を中心とするマルクス主義的な発想――日本語でいう大きな物語に反旗を翻すものだと考えていいでしょう。韓国ではよく「民族史観」といいますね。それにたいする反発と考えてもいいと思います。歴史研究の流れでいくと、4・19革命後の1960年代、70年代に民族史観が出てきて、それから80年代に民衆史観、そして80年代末ぐらいに植民地近代化論が出てきて、90年代になってポストモダンの影響をうけて微視史というのが出てきたと大ざっぱに考えてもいいのではないでしょうか。

ただそれでも韓国の場合には、民族史観といいますか、そういう従来の伝統的っていいますか、歴史的な考え方、歴史研究の考え方が非常に根強いのです。当然、それは日本の植民地支配をうけて、いまも統一民族国家を作り上げていないところからきています。日本で民族史観といえば敗戦後しばらくして対米独立の意味で「民族」そして「国民」が歴史研究や社会運動で重視されたことがありますね。これは左翼、進歩勢力からの接近ですが、現在日本で「民族」などといえば、これはもう自由主義史観というか、新しい歴史教科書をつくる会など、右翼の発想としてしかないですね。もっとも同じ民族でも、韓国のはあくまで統一を達成するための健全な意味合いを帯びているのにたいし、日本では戦前の皇国史観につながる危なっかしいものです。

それにしても、韓国で微視史といったものが影響力をもちはじめて

いるように見えますが、だからといって巨視史が不要だというわけにはいきません。脱国家・脱民族の方向で議論するそうした歴史研究者も、すべてがポストコロニアリズム／脱近代論の賛同者というわけではないでしょう。もちろん、微視史を重視する人たちに、フランス現代思想を中心とするポストモダンの思考が大きな影響を及ぼしているのは間違いないと言っていいでしょう。ただ彼らも、よく読んでみると、ポストモダニズムが民族問題や階級問題にたいする展望や戦略をもっていないというのは正しくない、民族や階級をみる視角とか接近方法が違うだけなんだと主張したりします。つまりポストモダニズムは民族や階級を客観的なもの、あるいは先験的なもの、さらには固定的、観念的なものとしてみるのではなく、本質的には言語と言説の所産として流動的、そして可変的なものとしてみたいというのです。まあ、このようにきちっと説明する人はそう多くないですが、理論的にはこう理解していると言っていいはずです。

私自身、そうした主張自体は大筋では間違っているとは思わないです。しかし現実問題としていうと、そうした主張をする人たちが自分たちの歴史研究でそれを貫徹させているかといえば、どうもそうではないようです。やはり、なんというか、あまりはっきりと言うのもなんですが、韓国の歴史と社会の構造を十分に把握し、未来への道程を指し示すのにそれなりの成果をあげているとは言えないんではないかと思っています。もう少し強くいうと、そこには統一民族国家の建設という近代プロジェクトさえいまだ達成してない条件で、朝鮮の民族と階級にまつわる問題を十分に考慮の対象としていない欠点があるのではないかと思ってるんです。

もちろんこう言ったからといって、微視的な歴史研究が不要だというのではありません。歴史研究を豊かなものにし、過去をより広い意味で理解するのはいろんな発想や研究方法があっても何もおかしくはないです。問題は巨視史と微視史のあいだの対話、交流がうまくいっていないということ。私は両方とも必要だと思うんです。普通に考えて、両方とも必要なんだけど、ただその相互関係がうまくいってない。

それを何とかうまくいかせる方法はないかということを考えなければならないんです。それはやはり、研究方法論ということを考えなくてはいけない。そこで重要になってくるのが「近代性」という考え方、物の考え方、あるいは「植民地性」という問題、あるいはそれと関連した「脱植民地主義」ということなんではと最近強く思ってます。

歴史を考える場合、やはり民族と階級というものは外して考えることはできない。私は日本でも同じだと思っています。皆さん言わないですけどね。日本で民族と階級なんて言いますと、せせら笑われますけども、日本で民族問題の最たるものは天皇制の問題です。天皇制は民族問題です。幕末、日本が――「日本」という呼称もまだ普及してなかったのですが、つまり日本列島が西洋列強の植民地下に入りかねない危機的な状況で、どうやってそれを逃れていくかという「民族」の大問題に遭遇して、結局は政治的忠誠を絶対化する天皇制を導入して切り抜けようとしたのです。現在、過去の清算がうまくいかないというのも、私は究極的には天皇制の問題、それにまつわる思考の問題があるからだろうと思っています。だから日本にもれっきとして民族問題がある、と。階級問題もあります。ホワイトカラーが、なぜ朝8時に家を出たら、夜1時、2時まで仕事をせざるを得ないのか。毎月数十、数百人の人間が過労死で消えていく。これはやっぱり階級問題です。だけどそれは見えない、実感しない、あるいは考えないようにしていると。韓国の場合はこうした階級問題は、日本よりはもっとはっきりと見えてきます。昔に比べて見えなくなったという人もいますが、まだまだよく見えます。新聞などを見ると、韓国ではいまも毎日のようにデモやストライキをやっています。労働者だけでなく、農産物の自由化に反対する農民もです。学生ももちろんです。そこには確実に階級格差にたいする怒りがあると考えていいんです。

日本では民族とか階級は死語になって久しいですね。民衆なんてのも言わないし、せいぜい国民か、市民ですよね。しかも国民と市民はどうも対立的な概念で考えられているような気がします。その点、韓

国ではいまなお民族とか、国民、民衆、市民といった言葉は並列して、そしておそらく相互補完的なものとして使われているように思います。1970年代に民族文学が高らかに謳われ、80年代になって民主化闘争と関連して民衆文学というのが盛んになったのですが、そのとき民族と民衆はけっして対立的なものではなく、民族の闘う主体をより具体的に理解し、説明するために民衆という言葉が必要だといわれたんです。90年代の市民という言葉も同じで、現に韓国では民衆運動と市民運動の協力、連帯がつねに運動の課題として提起され、議論されているくらいなんです。

しかも現実問題として南北分断があるんです。いつ戦争が再発するか分からないという危機意識、不安感が、みんなの心の奥に潜んでいる。これはやっぱり民族問題なんですね。そういう意味からしても、民族問題、階級問題っていうのは、韓国では日本よりは見えやすいし、見えているし、そしてそれに取り組もうとする人も少なからずいると言えます。ただその研究方法論として、何をどう位置付けるのかというと、いまのところははっきりとしたものがない、見通しがないというのが、現在の韓国の状況ではないかと思っています。微視史というのはそれを突破しようとする一つの試みですが、それだけで全部担えるというわけではないでしょう。

もう一度言いますと、1980年代のマルクス主義の導入、そして民族主義——。マルクス主義ってのは必ずしも民族というものをきちっと定立したわけじゃないですが、それでもマルクス主義との関係で民族問題が盛んに議論されてきたのは事実です。韓国ではそれは民衆主体とかというかたちで議論されもしました。それが1990年代に入ると、ポストモダンの思考が入ってきた。そういう中で民族主義というのは、むしろ非難されるもの、注意すべきものとして捉えられたんです。それが大きなひとつの特徴です。皆さんもご存知のように、林志弦（イム・ジヒョン）氏とか權赫範（クォン・ヒョッポム）氏は、そういう民族主義批判の代表選手ですし、また高美淑（コ・ミスク）氏は二分

法批判、フェミニズム、ジェンダー論の急先鋒の役割をになっています。

そうした人たちの議論を聞いてみるとなるほどと思うことが少なくないです。ずいぶん勉強になります。ただ、だからといって、民族主義を全否定していいのか、男／女、自己／他者、内部／外部といった二分法を全部考えないですむかというとそうはいきません。両方を考える必要があり、両方を相互補完的に総合するものを作り上げていく必要があるのでは思っているんです。たぶんその意味では、現時点で韓国の民族主義のマイナス面があまりにも大きいので、かれらは今、民族主義を批判するという役回りをわざとしてらっしゃるのかなあという気もするんです。ジェンダーとかフェミニズムの問題もここしばらくのあいだずいぶん論じられましたが、そういうポストモダン的、脱近代的な考え方は90年代後半から昨年くらいまで、かなり大きな影響力をもってきたんだろうと思います。

ただ今年に入って、少し様子が違ってきているような気がします。ご存知のように『実践文学』（秋号）では、親日文学作家42人の名簿を発表しました。たしか３月でしたか、国会議員が集まって親日派を追求し、清算すべきだといって国会に委員会かなにかを設けるべきだとして、集会もしましたね。これは1948年に李承晩によって潰された反民特委を再設置すべきだという動きだと理解していいものなんでしょう。歴史学界などでも今年は非常に親日派の追及、親日派清算にたいする要求が高まっております。そして民族主義を批判してきた林志弦氏などにたいする理論的反駁もおこなわれました。例えば『社会批評』の編集主幹である金鎭奭（キム・ジンソク）氏は、最近林志弦氏の民族主義批判、そしてその仲間の文富軾（ムン・ブシク）氏の日常的ファシズム論というのか、あるいは内なるファシズム論はあれこれ言うだけの「宗教的根本主義」ではないのか、一種のユートピア的思考ではないのかと批判しています。それだけでなく、そういうことを言う本人たちは解放後韓国でもっとも国家主義的というか権力主義的な民族主義に加担し、朴正熙式のファシズムを擁護してきた「朝鮮日

報」ときわめて親和的な関係をもってきたのではないかと、真正面から批判しています。ダブルスタンダードというか、二重性をもっている、信用できないというんです。

こうした状況をみると、理論というのはほんとに難しいものだなという気がします。研究方法論は重要だと、私などもときどき口にしますが、実際にはなかなか難しいものです。

その意味では、近年のポストモダン的な思考が提起した「近代」／「近代性」、「植民地近代」／「植民地的近代性」／「植民地性」といったものの内容をもう一度しっかりと吟味し、そうしたものを植民地朝鮮の政治や経済、そして文化や教育、思想などの研究にどう適用できるかを考えてみることが重要ではないかというふうに思うのです。その場合、もちろん、近代性というは歴史の具体的な関係性のなかで形成される重層的、複合的なものではあるけれども、近代性そのものはいったんは自己解放の力であると肯定的なものとして捉えるしかないのではと考えています。そりゃ、歴史のいろんな具体的場面では、近代性というのは、同時に統制や抑圧の力としても働くものでもあるし、その意味では、近代や近代性というものを二重的に、さらには多層的、複合的に理解することが不可欠になってきますよね。

しかも、そこに「植民地近代」というものを設定すれば、西洋近代と植民地近代は相互補完的、相互浸透的なものであり、さらに近代と植民地近代の相克を認めることによって、植民地近代のなかにあった西洋的な意味での「普遍性」も認めることができるのではないかと思っています。言い換えますと、西洋近代が植民地主義を本質とするものであったことからすると、非西洋を含む意味で、脱近代＝脱植民地主義という問題設定をすることによって、植民地朝鮮をはじめとする非西洋の歴史研究をより豊かな方向で発展させられるのではないかと期待しているんです。

なにか、自分でもよく分からないような、たいへん難しいことを言ってしまったようですが、じつはこれは、私がいま、必死にまとめよ

うとしていることなんです。まだ完成していませんが、もうすぐ完結した文章、――短いものですが、なんとかまとめたいと思ってるものなんです。昨年度１年間、ロンドン、そしてソウルに滞在しながら、よく雑誌などで言われる近代性とか、植民地性とは何だろうと思って、自分なりに脱近代と脱植民地主義の問題を絡ませてひとつの論理というか、私なりにいうなら、研究方法論を確保したいと思ってのことなんです。

ロンドンやソウルで暮らしながら、その間ずうっと気になっていたことは、日本語のモダンとかポストモダンとか、あるいはポストコロニアルという言葉と、韓国の「近代」、「脱近代」、「脱植民地主義」という言葉は、どう違うのかということ。そしてその意味する内容はどういうものなのかということでした。私は今後はできれば朝鮮近代の思想と日本近代の思想を突き合わせて、相互の補完関係、浸透性、重複性、二重性というようなことを勉強していこうかなと思っています。日本と韓国、――思想の断絶、ずれ、そして共通性、あるいは交錯というようなことを勉強していきたいなと思ってるわけです。けれども、やはりそこで方法論というものが難しい。これは歴史学や思想史だけでなくて、いろんな分野に関わる問題でしょうが、そういう意味ではやはり「近代性」とか「植民地性」、あるいは「脱植民地化」／「脱植民地主義」っていうのは、いったい何を意味するのかということをもう少し自分なりに整理してみる必要があると思っているのです。それでソウルでは、私がよく通った植民地近代の研究会とか、あるいは歴史問題研究所の研究会で自分なりに考えた文章を発表して批判を受け、そして日本に帰ってきてからまた、その文章を何回か直して、２回ほどそれぞれ別の研究会で意見を述べて、批判してもらいました。

「近代性」とは何かといったことでも、近代性／モダニティの議論は随分盛んですよね。あまりに多くて、実は私には議論する能力もない感じがするほどです。もう世界で数百冊、数千冊の本が出ているわけですから、とてもまともに取り組むことはできない。そこで最初から、そういうのは頭のなかから全部追っ払って、自分勝手にこういう

ふうに理解してよいのでは、こう考えてよいのではと整理しようと思ったのです。

さきほども少し述べたと思いますが、私は「近代性」というのは、歴史の具体的な関係のなかで形成される重層的、複合的なものであると思います。この場合、近代性というのは、いったんは自己解放の力であると肯定的なものとして考えたい。しかし歴史の現実では、近代性というものが同時に統制・抑圧の力としても働いたのも確かです。実際、近代国民国家の形成にともなって確立されていったいろんな制度や統一的言語、あるいは学校や新聞メディアなどはすべて、近代性の自己解放的な側面と統制・抑圧的側面を同時にあらわす装置として機能したと言えます。このことはやはり認めざるを得ないだろうと思います。軍隊は近代的か、あれは人を殺りくするもんじゃないかといえば、これはこれでまた議論になります。だけど近代国家の形成が肯定的側面をもつとするなら、その重要な軸をなした軍隊、軍事制度もいったんは肯定的に評価せざるをえなくなります。モダニティというもの、近代性というものを一旦肯定的なものとして見ないと、近代そのものが語れなくなるんではと思うんです。一旦肯定的なものとして見るってことは、当然、否定的なものでもあるということです。つまり歴史の具体的な現実のなかで、近代性とか、モダニティというものをみると、それは肯定と同時に統制とか、否定的なもの、あるいは抑圧の力としても働くんだということなんですね。そのことはやはり了解しなくてはいけないだろう考えます。学校とか新聞とか、ありとあらゆるものがそうです。

そういう意味では「近代」とか「近代性」というもの、「モダニティ」というものは、二重的、あるいは多層的、複合的なものとして理解していく必要があると。韓国でポストモダンを主張している人たち、例えば活発に市民活動をしているグループでいえば、「研究空間―ノモ（超える）」なんてありますが、そこの中心メンバーである李珍景（イ・ジンギョン）などは、そういう近代を多重的に見るという観点

をずいぶん強調しているように思えます。市民参加の各種講座を開いているのですが、そのプログラムはほんとに多彩なもので、哲学、社会科学、人文科学はもちろん、文学、音楽、映画、表象論など、なんでもございという感じです。

ただここでやはり重要なのは、たんなる近代だけでなく、「植民地近代」というものを考える必要があることです。韓国でももちろんですが、日本でもそうした発想をもつ必要があり、ヨーロッパでもそれを抜きにして語るとうまくいかないと思うんです。近代そのものが植民地主義と表裏一体のものだし、その植民史主義は西洋列強による侵略・植民地支配と、それを受けた非西洋の被侵略・植民地経験として表現されるんですから。つまり近代ってのは西洋近代だけではないんだと。アジアにも近代があるし、それは西洋の近代、そして「普遍性」といったものと密接な関係をもつものとしてあるんだということです。とくに朝鮮の場合には、これは完全植民地であったし、いまもアメリカの新植民地という性格をもってるわけですから、これはもう近代や近代性だけで考えるのは無理で、どうしても植民地近代やそれにともなう植民地性といったものを考える必要があると思っています。

このように考えてみると、近代性の形成にはさまざまな類型があるでしょうが、日本の場合には、西洋列強によって強要された近代性という特質をもっているのではと思います。しかも帝国日本の形成にとって、天皇制の導入は近代性の形成にポジティブな意味をもったといったん考えるのがいいでしょう。実際、天皇制は日本のナショナリズムの形成に中軸的な役割をになうことによって、日本の対外的独立と国内の近代化に少なからぬ力を発揮したんですから。もっとも、天皇制は同時に、例えば吉田松陰の天皇への政治的忠誠の絶対化、一君万民論などの主張にみられるように、あるいは大日本帝国憲法や教育勅語にもみられるように、封建的というか、前近代的特質をもったものであり、否定的側面をもったことも事実です。アジア侵略もそれと密接不可分なものですよね。そうした意味では、天皇制は、政治機構と

イデオロギーの二つに分けて考えるとしても、その両面において「西洋近代」が志向した「普遍性」とは反対の意味をもつものであったと言わざるをえないですね。もっとも、そしたら西洋近代はそんなにいいものだったかということになるかも知れませんが、それはそれで、さきほども言いましたように、重層的、複合的に考えなくてはならないでしょう。

日本のことはさておきまして、朝鮮の場合、「植民地近代」と「植民地的近代性」、あるいは「朝鮮的近代性」ということを考える必要があろうといった場合に、やはり私は韓国において、近代／脱近代をめぐる現在行われている議論のなかで一番特徴的なことは「植民地近代」という時代が設定されていることではないかと思います。日本で幕末・近代のことを論じる場合、植民地近代という設定は基本的にはないですよね。はたしてそれでいいのか、私は大いに疑問ですが、それはともかくとして、韓国での議論ではすでにそうした問題設定が入っているのが正しいと思っています。とすると、植民地的近代性という、これまた日本ではあまり議論されない概念が入ってきますが、ほんとはこの植民地的近代性という概念は日本のことを論じる場合にも、ずいぶん重要ではないかと思っているんです。近代日本の知識人がなぜ被害者意識に囚われがちなのか、あるいは現在もなぜ日本では過去の清算、過去の克服がうまくいかないのかといったことを考えるときに、この植民地的近代性という概念をもってくれば、案外理解しやすくなるのではとさえ思っているんです。

「植民地性」というのはもちろん近代性と対になる言葉で、その逆の意味を示すものです。だから近代性が自己解放の力であるとするなら、植民地性は自己抑圧の力とでも考えればいいでしょう。近代性と植民地性というものを対にして考える。これは非常に重要ではないかなと、最近思っています。これはあくまで配置の問題、関係性の問題ということになります。例えば在日朝鮮人は、自ら在日朝鮮人であることを、非常に悩み、苦しみます。自らの責任ではない、自分の出自

に対して悩む。しかしある日、在日朝鮮人とは何か、自分たちはどういう存在であるかということを理解し、納得し、そして乗り超えたとき、同じ自分の存在というものがプラスに転化いたします。「そうか、おれは在日朝鮮人か。これは日本の歴史において負の存在であるけれども、自分はちっとも悪くはない。自分の存在を自分で決めたわけでもなく、これは歴史や社会の問題なんだ。むしろ社会を変革していく重要な立場にいるんだ」と。

同じ人間が昨日と今日では、全然思うことが違うんです。したがってやることが全然変わってくると。ある日突然変わるという、これは配置の問題、関係性の問題ということになります。そういう意味では歴史学でいう中心、半周辺、周辺というような問題。これもやはり近代性とか、植民地性の問題として理解する。あるいは配置の問題として考えることが必要ではないかなと思っております。

もう少し広く考えるとするなら、「近代人」というのは、近代性と植民地性のさまざまな「配置」によって構成されるものではないかということなんです。この「配置」という概念は、フランス現代思想の重鎮であるドゥルーズなどによって使われますが、ここでは当然、歴史や現実の「関係性」のなかで物事を考えようとする態度が重要です。もちろん、差異というか、相違によって、同じ近代性の要素でも、異なった配置のもとではまた違った性格をになうことになります。その意味では、植民地性というのも、侵略や戦争などの殺戮とか抑圧だけでなく、中心、半周辺、周辺のそれぞれの構造にさまざまな形で組み込まれいる多様で複合的な差別とか、抑圧、蔑視、虚構の観念などによって生成されるものであると言っていいのかもしれませんね。

まあ、いってみれば、完成した近代性というものはないですし、また固定不変の植民地性というものもないはずです。近代性と植民地性の「配置」というのは、侵略・被侵略、抑圧・被抑圧、差別・被差別の状況が変わることによって変化するもので、またとくに歴史の具体的な場面で闘うことによって変化するものだということです。つまり、

あえて言ってしまえば、肯定的な意味での近代性というのは、闘うことによって獲得しうるものではないかということになります。実際、マルクス主義の発展史観と同じ意味ではないですが、人類の歴史というのは、闘争する過程をつうじて大きく進歩してきたんですよね。

このように考えてくると、結局のところ、「植民地的近代性」というのは、近代性と植民地性が相互浸透的なものであるかぎりにおいて、やはり近代性の一部を構成するものと了解することができます。植民地下で獲得する近代性というのは、もちろん非常に微妙で複雑なものでしょうが、とくにそれは、植民地支配の具体的な状況のなかで西洋的近代性と対比されるかたちで概念化されるものだと言うことができます。その意味では、植民地的近代性はそれ自体、歴史の具体的状況においてはじめから二重性を帯びたものなんですね。あまり無理に類型化するのもなんですが、ひとつは植民地化を容認することによって歴史主体形成の意味を軽視してしまう「主体構成過程を欠いた近代性」とでもいうものがあります。もうひとつは植民地化に抗しながら、負の側面から「主体構成過程を歩む近代性」というのも考えられるはずです。つまり侵略勢力や植民地権力によって日常的に主体化の契機が歪曲されるなかで、歴史主体としての自己の方向性をどこに見いだしていくかの問題なんです。歴史の具体的事実に即していうなら、もちろん誤解を恐れずにきわめて単純化していうのですが、近代朝鮮の文学でいえば李光洙（イ・グワンス）は前のほうに属し、結果的に植民地性によって内面精神が犯されて「親日派」として指弾されることになったんではないでしょうか。それにたいして、日本でもよく知られている抗日詩人の尹東柱（ユン・ドンジュ）は後者に属すると言えるんでしょうね。

このようにお話しすると、いま韓国で大きな問題になっている親日派の清算・糾弾の問題が、まさに近代性、植民地性、植民地的近代性の問題に関わることだということが理解されるはずです。それは当然、脱植民地主義をめぐる議論でもありますよね。

「脱植民地主義」というと、分かったような分からないような、ますます難しいお話になっていきそうです。言葉そのものはそんなに難しくなく、そのまま理解できるようなものですが、それはほんとに奥深い意味を包み込んでいるものではないかと思います。それを5分か10分、私がお話して、すっと理解できたというわけにはいかないし、話している本人が、また全部理解しているかどうか、怪しいもんです。しかも「近代」もそうですが、「脱近代」となると、最初にもお話したように、人によって言うこと、考えることがずいぶん違うんですよね。

脱近代って何なのか、よく分からない。近代で解決されないことがある以上、脱近代を考えなくてはいけないのか。近代を乗り超えたら、脱近代になるのか。何かよく分かりませんが、脱近代というものを主張する議論があることは事実です。しかし私なりに考えると、「脱近代」というのは「脱植民地主義」を本質とするものではないかと思うのです。近代という時代の特質である植民地主義を克服する努力をすること、それは必然的に近代を抜け出ようとすること、克服しようということではないかということなんです。

ここで重要なのは、脱植民地主義というのは、植民地主義の対象となった非西洋だけでなく、植民地主義を各地域で実践した欧米諸国、そして日本などの帝国主義国の課題でもあるということです。英語で言うと、ポストコロニアル（postcolonial）ですが、英語の表現と日本語・朝鮮語の脱植民地主義という表現をやはり区別して考えたいというふうに思っています。つまり西洋産のポストコロニアルという視点は確かに重要です。しかし南北朝鮮とか、そして日本も含めてと言いたいんですが、アジア、アフリカなどの非西洋では、やはり欧米や、そういうところの議論とは違ったかたちの知の枠組みが必要ではないかと思うのです。

私はそれを「脱植民地主義」と言いたいのです。「脱近代」という言葉を使う意味は、それは「脱植民地主義」であって、そして近代の植民地主義をお互いに乗り超えていくために、自己と他者が一緒に考えるということではないかなと思っています。

これは植民地主義を実行した西洋の課題でもあるし、植民地主義で被害を被った非西洋にも当てはまることです。もちろん、西洋と非西洋とではその中身に違いがあることは当然です。そういう意味では、ごく単純化していうなら、脱植民地主義というのは加害者の側からすれば反省になるし、被害者の側からすれば抵抗になると。韓国などある程度経済成長して世界に進出するとなるとまた複雑になってきますが、基本的にはいま言った考え方ではいいのではないでしょうか。日本の場合ですと、やはり過去の清算をするということ。それは脱帝国主義ですが、歴史に即してあえていうなら「脱天皇制／脱天皇主義」でなければならないはずです。原理的にいうとそれしかないです。もちろん、さらに突き詰めていくと、脱近代＝脱植民地主義というのは、資本主義そのものとの闘い、あるいは反システム運動の問題に関わっていくことになるんだろうと思います。

「日本統治下の朝鮮」、そして「研究の現状と課題」という今日の主題からするとなにかとんでもない方向に話がとび、分かったような分からないようなお話をしたことなりかねませんが、これまでの手法で、そして主として歴史研究だけで植民地時代の歴史を研究する、また思想史をするというわけにはいかなくなってきています。そこでなんとかいい方法がないかと悪戦苦闘して、いま述べましたようなことではどうかと、私なりに考えているわけです。日本と朝鮮、南北分断、過去を反省しない日本、世界の植民地支配と被支配の問題、近代を乗り超えようとする努力、さらにはグローバリズムという急速な流れ、そのなかで主権や主体、個人の尊厳を確保していきたいという闘い、これらすべての課題を統一的に、一貫してとらえる視角、方法論、そして現実的な方策は何かということなんです。学問的には非常に重要な問題ですが、多分、今日からここで議論されることもそうした問題意識にもとづいたものだと思います。

なにか中途半端な、まとまりのないお話になりましたが、一応これで終わらせて頂きます。ありがとうございます。

要約

「근대/탈근대론과 탈식민주의- 역사연구의 과제 및 방법론과 관련하여」

역사연구는 각종 인문·사회과학의 연구에 있어서 중요한 위치를 차지한다. 그것은 사람들의 삶에서 역사인식의 양상이 핵심적 사항이 되는 것과 관련된다.

일본과 조선은 주지하는 바와 같이 불행한 형태로이기는하나 「근대」라고 하는 한 시대를 공유하였다. 말하자면 일본과 조선의 근대사, 그리고 현대사는 표리의 관계에 있고 따라서 일본의 식민지통치하에 있었던 조선을 연구하는 것은, 오늘을 살아가는 일본 및 남북조선의 사람들의 삶에 있어서 대단히 큰 의미를 가진다. 그러한 가운데 일본과 남북조선, 특히 남쪽의 한국에서는 1980, 90년대이후 식민지조선의 역사연구가 비약적으로 진행되어 정치나 경제, 문화의 방법론은 근년, 세계의 역사연구의 진전과 연동하는 형태로 크게 변용하고 있는 중이다.

조선의 근현대사는 일본에 의한 식민지배와 해방후의 남북분단에 의하여 크게 규정되고 있다. 한편 종주국이었던 일본의 근현대사는 정치기구로서의 천황제에 의해 일관되게 규정되어 있고, 그것은 일찌기 일본의 식민지지배에 대한 역사인식이나 과거의 청산문제에 적지않은 영향을 미치고 있다.

기조보고에서는 한국에 있어서의 역사연구의 과제 및 방법론과 관련하여 몇개의 문제에 대해서 언급하고 싶다. 그경우 방법을 행방후 논의되어 온 역사연구 고유의 방법론에 극한하기보다는, 오히려 1980년대이후 특히 90년대에 한국학계에 적지않게 논의되었던 포스트모더니즘/탈근대론, 포스트콜로니얼리즘/탈식민주의 시점, 혹은 근대성이나 식민성이라고하는 새로운 시각에 입각하여 논하고 싶다.

식민지하의 조선에서는 정체사론, 타율성사론, 문헌중심의 고증

학이라고 하는 식민사관이 커다란 위치를 차지하고 있었다. 그러나 그러한 가운데에서도 해방전에 이미 조선인학자에 의하여 사회경제사의 방법론으로 자본주의의 맹아에 대하여 문제제기가 있었다는 것은 잘 알려져있다. 해방후, 종래의 식민사관을 극복하기 위하여 식민지지배의 수탈성과 죄악성을 밝히려고 하는 역사연구가 개시되고, 그속에서 조선왕조후기의 사회에서 자본주의의 맹아를 찾아내려고 하는 내재적 발전론등이 주장되어 되었다. 역사연구의 과제로서는 민족문제와 계급문제가 중시되었는데, 1980년대에는 민주화운동의 전개와 함께 맑스주의를 암묵적 기반으로 하는 민중사관이 제기되고, 변혁주체로서의 민중이 강조되게 되었다. 그러나 그후, 한국의 경제발전을 배경으로해서 80년대말에 소위 식민지근대화론이 제창되어 식민지시대의 사회경제적 변화를 개발로 볼 것인가, 수탈로 볼 것인가를 둘러싸고 오늘날에 이르기까지 커다란 논의가 전개되어 온 것은 주지하는 바와 같다.

1990년대 한국에 있어서의 사상적 특징은, 포스트모더니즘을 주로하는 각종 포스트주의나 문화이론등이 폭발적으로 유행한 점이다. 논단에 있어서의 논의의 중심은 맑스주의사상에서부터 푸코, 데리다, 들뢰즈 등의 프랑스의 현대사상으로 옮겨가, 언설되어진 말은 자본주의·국가·민족·계급이라는 난해한 것에서부터, 육체·욕망·문화·지식·권력 등의 포스트모던한 것으로 바뀌어 갔다. 자본주의·국가·민족·계급이라는 말은, 오히려 반민주적·억압적인 말로서 받아들여지는 사회적 분위기가 조성되어, 문학이나 예술을 비롯하여 인문·사회과학 전반에 영향을 미치고, 근년에 이르러서는 역사학의 분야에까지 적지않게 침투하게 되었다.

실제로, 최근의 『역사비평』의 특집이나, 예를 들면 『포스트모더니즘과 역사학』이라는 서적의 출판에서도 볼 수 있듯이, 한국의 역사학계에서는 「탈국가·탈민족」이 역사연구의 과제 및 방법론에 관련되는 커다란 이슈로서 부상하고 있다. 민족주의비판은 그 단적인 예인데, 단지 그러한 논의가 종래의 고정적인 관념을 배격하고 다양한 사고방법을 초래하는데 공헌하는 것이라 해

도, 남북조선의 역사와 사회구조를 충분히 분석하고 탈분단, 그리고 남북통일로 향하는 미래에의 도정을 바르게 이끌어나갈 수 있는 것인지 어떤지는 아직 모른다.

포스트모더니즘/탈근대론이나 컬쳐럴스타디즈, 포스트콜로니얼리즘/탈식민주의의 수용은, 한국에서는「근대」나 「근대성」은 무엇인가라고 하는 문제를 지식인에게 디밀어, 그것은 곧바로「식민지근대」및「식민지적 근대성」/「식민성」의 문제, 나아가「탈식민지」나 「탈근대」를 둘러싼 논의에 이어진다. 현실에는 그러한 것들은 근대/탈근대를 둘러싼 논쟁이나, 페미니즘를 비롯한 각 영역에서의 민족주의비판이라는 형태로 주로 논의되고 있으나, 그 기저에는 「거시사」를 대신하는 「미시사」라는 발상을 어떻게 이해해야할 것인가, 또 제국주의/민족주의, 내부/외부, 이성/감정, 자기/타자, 남/여, 라는 전통적인 이분법을 입론의 기반으로 부정해야하는 것은 아닌가라는 기본적인 문제가 있다.

탈국가·탈민족의 방향에서 논의하는 역사연구자가 모두 포스트콜로니얼리즘/탈근대론의 찬동자라고는 할 수 없을지라도, 그러한 주장의 근저에 프랑스현대사상을 중심으로하는 포스트모던적인 사고가 큰 영향을 미치고 있는 것은 틀림없다. 그들 자신은, 포스트모더니즘이 민족문제나 계급문제에 대한 전망과 전략을 결여시키고 있다는 것은 옳지않고, 본질적으로 언어와 언설의 소산으로서 유동적·가변적인 것으로 본다는 것이다. 이 주장 자체는 요점에 있어서 틀리다고는 생각하지않으나, 그러나 그러한 그들에 의한 역사연구는 지끔까지의 상황에서 보면, 한국의 역사와 사회의 구조를 충분히 파악하고 미래에의 도정을 지시하는데 나름대로의 성과를 올리고 있다고 하기는 어렵다. 거기에는 통일민족국가의 건설이라는 근대프로젝트조차도 아직 달성되지 않은 남죽조선의 민족과 계급에 관련하는 문제를 충분한 고려의 대상으로 하고 있지 않는 결정이 있는 것이 아닌가라고 추측되기도 한다.

이러한 것을 생각할 때, 근년의 포스트모던적인 사고가 제기한「근대」/「근대성」,「식민지근대」/「식민지적 근대성」/「식민

성」등의 내용을 지금 재음미하고 그것들을 식민지조선의 정치경제, 그리고 문화나 교육 상황 등의 연구에 어떻게 적용할 수 있는가를 생각해 보는 것이 중요하다고 생각된다. 그러한 경우, 근대성은 역사의 구제적인 관계성속에서 형성되는 중층적, 복합적인 것이지만, 근대성 그 자체는 일단은 자기해방의 힘이라고 하는 긍정적인 것으로서 생각해도 좋을 것이다. 물론 역사의 현실에 있어서는 근대성은 동시에 통제·억압의 힘으로서도 작용하는 것이었고, 그런 의미에서는 근대나 근대성의 이중적, 나아가서 근대와 식민지근대의 상극을 인정함으로써 식민지근대속에 있었던 서양적 의미에 있어서의「보편성」도 인정할 수가 있는 것이 아닌가라고 생각된다. 더구나 서양근대가 식민주의를 본질로 하는 것이었다는 점에서 보면, 비서양을 포함하는 의미에서 탈근대= 탈식민주의의 문제설정을 함으로 인해 식민지조선을 비롯한 비서양의 역사연구가 보다 풍부한 방향으로 발전되어갈 수 있지 않은가고 기대된다.